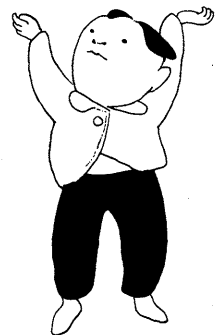


早く慣れて元氣よく遊び出せるようにと保育者は氣を配る。或いは新しい環境に出会ったときに示す行動やその行動に表れている気持ちは一人ひとり異なるのでそれらに丁寧に向き合っていこうとする。特定のおもちゃを手がかりにして活動が始められる人もいるし、興味を同じくする相手との出会いが活動を始めるきっかけになる人もいる。

また、何とかして「この人と一緒にいれば安心」と思える大人を探して安定しようとする人もいる。もちろん、泣いて母親を求めたり、ぐずったりして不安な気持ちを精一杯表現していくことで、新しい生活への入り口を乗り切ろうとする人もいる。

そんな中に幼稚園という未知なる空間を縦横無尽に動き回って過ごす子どもたちがいる。彼らは、テラスの端から端までを疾走し、姿を消したかと思うと、異年齢のクラスや離れたスペースに入り込んでいく。保育者が居場所を把握しようと



して確認に行ったときには既にその姿はなく、他の保育者や周りの子どもたちに聞いてまわる結果となる。様子を垣間見ると、大変興奮した面持ちで何かに駆り立てられるかのように走り回っている。少しでも興味を引かれるようなものや場面に会おうとそこに入り込み、しかし、一瞬のうちに別のものや状況が眼に飛び込んできてそちらへ向かっている。そして降園時間になってもなかなか自分の保育室へ戻って来ないし、まだ親しみの湧かない大人に促されても抵抗を示すばかりである。保育者とする様子が見えないこの人たちのことがとても気に掛かりながら、そこそこで自分

を求めるたくさんの要求に応えることで精一杯になつてしまふ。彼らにとつて馴染みのない園の間は、刺激に満ち満ちて興奮を呼び覚ますものであるが、次第に気に入つた場所・おもちゃ・絵本・窓からの眺めなどに安定を見つけ、それらが点と点をつなぐ線になつてくる頃には、自分なりの空間把握が出来上がつてきて激しい動きは減り、行動に落ち着きが見られるようになる。やがて、「自分の」保育室という感覚が芽生え、「かえつてきたよ」と言う気持ちが保育者にも伝わってくる。

空間を創り、壊す

ままごとコーナーには棚やテーブルや人形用のベットなどと細々したおもちゃが配置されているが、これらを移動する遊びが盛んになることがある。元の場所から、テラスへ、階段へ、ロフトへ。かなり重い木のテーブルや棚までも運んでい

く。その表情は真剣そのもの。黙々と競い合うかのように行つたり来たりを繰り返す。

或いは、ダンボールの囲いの中や椅子や棚を積み上げた一角に、運んできたものを配置して詰め込むことがある。ままごとのおもちゃばかりでなく、絵本や、セロテープカッター、はさみ、マジック、用意されていた教材などあらゆるものを運び込んでまるで巢作りのよう。物ごつた返した狭い空間の中で、紙を小さく切り刻んだり、マジックで描いたり、思い思いのことをしている。

しかし、いずれの場合も、動かして運ぶところに面白さの中心があるようで、かなりの労力を用いてようやく運び終えたからと言つて、そこで一緒に何かを始める訳ではないことが多い。じきに、運んできたものを投げたり、引つくり返したり引つ張つたりして、その場はめちやくちやになつて終息を迎えることになる。壊れてしまふおもちゃが続出し、保育者がその対応に追われるの

に對し、子どもたちは興奮して大喜びである。壞すというより変化させるといふ感覚なのか、また新たに創り出せるが故のエネルギーなのだろうか。

空間と空間の連なり

自分の保育室から、別の場所へ動くことに大変な精神的葛藤（不安感）を示す子どもがいる。お誕生会の遊戯室、発育測定の保健室、夏のプール、遠足のスクールバス、運動会のグラウンド、お遊戯会のホール……など。

保育者から移動することが告げられ普段と違う雰囲気になると、やっとと少しずつ安心して過ごせるようになっていた場所はたちまち、見知らぬ空間への恐怖に満ちて、暗雲が垂れ込める。パニックになって「プールしない」と泣き出したり、「すぐおわる?」「まだなの?」「やるの?」と何回も尋ねたりする。逃げて歩いて一緒に移動しな

い人もいる。拗ねて、柱の陰や裏側の階段に座り込み、動かなくなってしまう人もいる。保育者があれこれ工夫したり、苦心してその場へ連れていくと、意外とケロッとして過ごせたりするから不思議だ。親密な空間が、時間を連ねて存在することがいかに心を安心させてくれるものかと思う。

園に住まう

保育の中の「動く」「動かす」に思いを巡らせるとき、まず、以上のような光景が思い浮かんできた。大体はより年齢の低いクラスでの出来事であるが、子どもによっては年中だったり、年長だったりすることもある。幼稚園という空間（そこには人や物が含み込まれている）で、子どもたちが自分なりにそこに住み込むこと、言い換えれば安心してそこに存在できる自分自身になることは、さまざまな経過を通じて初めて可能となる。

初めのうちは、「自分の」保育室も存在せず、今
 していることから次のことへ移っていく時間的な
 流れも存在せず、保育者がいくら「おへやへ帰ろ
 う」と促しても受け入れられない気持ちをどう表
 現すればよいのか混乱してしまう。また、決めら
 れた場所で決められたようにおもちゃを使うので
 はなく、自分たちの手で自分たち自身の空間を築
 き上げようとする行為が、「引越しごっこ」や「ピ
 クニックごっこ」などの遊びに表れている。時に
 は、みんなと一緒に移動することに大変な抵抗を
 示す子どももいるが、そのような経過を日々の生
 活の中で繰り返し、積み上げることによって少し
 ずつ見慣れない異空間は、親しみを増し、安定し
 て過ごせる場所になっていく。

絆の関係性

幼稚園での生活が一人ひとりにとって楽しく充
 足したものとなるように、担任は、遊びや、身の

回りのことや、友だちとの関わり、生活の流れ、
 など様々なことに細かな配慮を重ねていく。子ど
 もの表現を受け入れ、そこに表れている子どもの
 気持ちを支え、時に、保育者自身の「私」という
 境界との葛藤を抱えながらも互いを理解し合おう
 と志向する。子どもたち一人ひとりとの関係が
 「信頼」という絆で結ばれていくようにと願い、
 努力する。それが時間をかけた長い道のりになる
 こともあるが、その為に迷い、悩み、考えながら
 日々を子どもとともに生きることこそ、保育とい
 う営みであると言えるであろう。担任は、子ども
 を操る技術でもって子どもを「動かし」、園の生
 活へ適応させていく訳ではない。しかし反面、担
 任は、子どもたち自身の気持ちや思いを丁寧に読
 み取り、尊重しながらも常に担任としての見通し
 の上に動いている。それが妥当でないことももち
 ろんあり、だからこそ、担任は日々反省的に自分
 自身の保育を振り返り、新たな見通しを持って、

新たに子どもたちと関わっていかうとする。

「動かす」意識が強くなりすぎてもいけないが、クラスや子どもたちの方向性を現実の子どもたちの姿から創り出していくのは担任の役割の重要な部分であると言えるであろう。

誤解を恐れずに言うならば、クラスを任されている担任には、そういった意味で子どもたちを「動かしている」という実感がある。それは、例えば、おもちゃを片付けてお弁当にするといったありふれた日常の生活の流れであったり、クラスのみんで一緒に散歩に出掛けることであったり、保育室でゲームを楽しむことであったり、行事に向かってクラス全体の意欲を引き出すことであったりと、数え上げればきりが無い。もちろん、子どもたちの自発的な遊びに対しても、現実の子どもたちの姿から見て、どんな援助が考えられるかを模索し、或いは、その中の「○○ちゃん」についてこういふところに気づいて欲しいと

いう願いをもって関わり、日頃気になつてゐる「△△ちゃん」の弱い面が克服されるようなチャンスを考える。このように担任は全て何らかの理解に基づいた、一定の意図を持った様々な関わりを行う。

通いあう心

ここまで考えてみて改めて保育の中の「動く」「動かす」について振り返ってみると、保育は一見すると、子どもの「動く」と保育者の「動かす」（裏を返せば子どもの「動かされる」という関係のように読み取れてしまう。しかしながら、子どもたちと保育者とがうまく調和しあつてゐる関係というのは、保育者の一方的な意図に子どもたちが素直に従つてゐるような関係を指すのではない。調和のとれた関係においては、保育者が子



どもたちを動かしたように見えることも、実は子ども自らの気持ちがあつたが故に他ならない。

子どもたちの実際の姿をよく見ずに一方的な意図で働きかけても子どもは動かないものだからである。例えば、朝の身支度がなかなか進まない人にその人自身の『今』の状態を無視して保育者の意図ばかりを優先させて関わっても、相手は決して保育者の望むようにはならなかつたり、頑なに「お友だちにはおもちゃを貸さない！」と頑張っている人に長々と説明ばかりを押し付けてもその人の心を動かすことにつながらなかつたり……といったことを保育者である私は繰り返し経験してきてしまった。また、強圧的な態度をとらなくても、担任は、口調や視線で子どもを操作してしまうこともあるので気をつけなければならない。

同じように声をかけ、注意して気づかせてきたつもりが、なぜ隣のクラスの子どもたちは、忘れずに庭靴をしまえるようになったのか。引出しを

開けっ放しにせずにはさみを出し入れ出来るのか。互いの気持ちを滑らかに言葉で表現できるのか。生き生きとよく関わり合つて遊ぶのか。心がこちら側にあつて、一方的に子どもたちを動かさうと焦っている間は、こういう類の迷いはなくならない。

以上のように「動く」「動かす」は単に子どもにとつての空間にまつわる動詞に留まらず、時間軸との交わりにおける保育者と子どもたちとの関係性を示唆している言葉であつたことが分かる。保育者として「動かす」を考へるときには、必ず子ども自身の「動く」を視野に入れて関わるようでありたいと思う。

(洗足学園附属幼稚園)